

四万十川流域の文化的景観

はじめに

四万十川流域で高知県内の5市町（四万十市・梼原町・四万十町・津野町・中土佐町）は文化的景観に関する関心が高く、5市町と高知県の清流環境課・文化財課、四万十川財団の協力を得て、四万十川流域の文化的景観の研究を開始した。今年度は四万十市・梼原町が文化庁の採択を受けて文化的景観保存活用事業を開始し、奈文研が調査の委託を受けた。

四万十川

四万十川は、1983年放映のNHK特集『土佐四万十川～清流と魚と人と～』の中で「日本最後の清流」と紹介されて以来、知名度が高まり、多くの観光客が訪れるようになった。四万十川の幹川流路は196kmで四国第一位、流域面積は2270km²で四国第二位であり、河口から梼原川合流点（標高125m）までの106kmは勾配が0.12%と極めて小さく、蛇行する流れと白い砂州の河原が特徴である。

河川そのものの景観の優秀さは、水質の良さと自然環境の多様性に関わっている。四万十川幹川はBODの環境基準で1mg/ℓ以下を達成、AA類型を維持しており、環境省の名水百選にも選定されている。幹川には発電用の佐賀取水堰が一ヶ所あるが、河川法で定めるダムはない。こうした施設の少ないことは、上流から下流への礫が供給され、礫間浄化機能が保全されることに繋がって

いる。河口部から約10kmが汽水域でアオノリの養殖がおこなわれ、アカメが生息する。河口部から80kmの中流部までボラやギンガメアジなどの海水魚が遡上し、四万十川では150種を越える魚種が確認されている。護岸では工事された部分が少なく、水辺には草地や河畔林・溪畔林が残され、生物にとって重要な水域から陸域にかけての連続性が確保されている。こうした環境の豊かさゆえに数こそ少ないが、川で生計を立てる専門の川漁師も活躍している。伝統漁法であるアユの火振り漁は7～10月に下流から中流でおこなわれ、風物詩ともなっている。

四万十川の沈下橋

四万十川を代表する景観の一つに沈下橋がある。沈下橋は、橋の上に欄干が無く、橋桁が低く水面と大きく離れないことが特徴である。大水の時には水面下に沈むことを想定しており、欄干がないのは流木や土砂が橋桁に引っかかり橋が破壊されたり、川の水が塞止められ洪水になることを防ぐためである。高知県以外では、三重・徳島・大分・宮崎の各県にあり、潜水橋・もぐり橋・潜没橋・潜流橋・沈み橋・冠水橋とも呼ばれる。昭和30年代以降、流域の交通運搬手段が筏・センバ舟・高瀬舟などから車・トラックに変わったことにより、流域に多くの沈下橋が架設された。交通量が比較的に少ないため、建設費を低く抑える必要があつて、沈下橋が採用されたと考えられている。沈下橋は欄干を省き、橋脚を低くし、橋長を短くすることのできる構造であつた。

現在も沈下橋は川を挟んだ集落同士を最短距離でつなぐ生活道として重要な役割がある。また、夏には子供た



図96 下流部高水敷でのアオノリ干し（四万十市）



図97 佐田の沈下橋（四万十市）

ちがこの橋を川への飛び込み台にするなど、水に親しむ場となっており、四万十川流域の人々にとって豊かな生活空間の一部ともなっている。それでも転落事故が絶えないことや、山間部でも抜水橋（沈下橋に対して沈まない橋）が造られるようになったことから、その数が減ってきた。1996年3月に高知県が策定した「清流四万十川総合プラン21」では、沈下橋を生活文化的遺産とし、様々な検討を経て2000年には県内の47橋について防災上または維持管理上支障のないものは、原則保存する方針を決定している。沈下橋は周囲の自然景観とよく調和していることから観光のポイントともなっており、地域の歴史的社会的特性を反映した施設として、その文脈を逸脱することのない修景が必要である。

四万十川流域の土地利用

四万十川流域には近代になって木材搬出のために敷設された森林軌道の跡や鉄道橋も残り、土地利用と産業の変遷をも物語る。現在、森林は流域面積の83%を占め、そのうちの約30%が天然林で、国有林の風景林や学術参考保護林として植生の保護が図られてもいる。また、持続可能な林業振興への試みもおこなわれている。森林の有する機能には土壌保全・土砂災害防止・水源涵養などがあり、河川景観の優秀さは河川構造物の少なさだけではなく、流域の土地利用システムとも密接である。その意味で流域の棚田も清流四万十川にとって重要な土地利用である。梶原町の「神在居の棚田」は作家・司馬遼太郎が「万里の長城も人類の遺産やけど、梶原千枚田も大遺産やな」といったことで有名。1992年に棚田オーナー制



図98 神在居の棚田（梶原町）

度を開始し、その発祥の地としても知られている。石積み の畦が地形に沿った曲線を美しく描き、棚田百選にも選ばれているが、農家による耕作を維持するために区画の大規模化が図られたところもある。形態だけでなく、急傾斜地の斜面崩落防止や環境保全、水源涵養など国土保全の観点からも棚田の景観を評価する必要がある。

流域の祭礼

四万十市内には中世に関白一条家の荘園があった。応仁の乱を避けて前関白一条教房が移り住み、以後、一条家は京風の碁盤目状の町を開いた。京都の石清水八幡宮を勧請して不破八幡宮を建立、この地で100年にわたり公家文化を咲かせた。不破八幡宮の大祭では、四万十川対岸の一宮神社に祀られている三柱の女神から花嫁をくじで決め、女神を乗せた御輿が川を渡る。それと不破八幡宮からの男神御輿とが河原で激しくぶつかり合って「神様の結婚式」がおこなわれる。また、伝統行事「大文字山の送り火」も堤防から望むことができる。

梶原町内、四万十川支流の本谷川と中の川の合流点の山には竜王宮（海津見神社）がある。この地には海の神である大蛇が女の姿でやってきたという伝説があり、竜王宮には伊予・土佐の漁師の参拝が多かったという。山と漁民との関係は船木の生産地と消費地、水循環の上流と下流など生態学的な物質循環での説明も可能であろう。しかしながら、山中の神社に寄進された漁船や川舟を見ると、山と川、そして海までも一体的に捉えてきた地域の人々の生活が凝縮されているようであり、四万十川流域の文化的景観を象徴するように思われる。（内田和伸）



図99 竜王宮に寄進された漁船（梶原町）